

『ぼくの背中の温もり』

岡山大学教育学部附属中学校 3年

渡辺 泰成

「わあ、今年もこんなに教科書が・・・持って帰るの大変じゃな。」4月。僕は、机の上にどっさりと積み上げられた真新しい教科書を目の前にげんなりしていた。桜がひらひらと舞い散る中、僕は汗をかきながら、リュックに大量の教科書を入れ家へ持ち帰った。

家に帰ると、仕事を終えた父も帰宅していた。僕の父は本屋をしている。だから父も、この時期は、岡山県の小学校や中学校に教科書を手配するのに大忙しだ。そんな父は、僕に「おかえり」と声をかけると、汗だくになった僕を見て笑った。しかし、たくさんの本の教科書代を払ってくれている父を前に「重い、しんどい」と言っていられないと思い、苦笑いをしながらリビングを後にした。

その晩、僕は家族で夕食をとりながらリビングでテレビを見ていた。テレビの画面には日本の芸能人が、中国での貧困村取材している姿が映っていた。中国は、日本と同様に義務教育の9年間は無償だが、教科書は有料な地域が多いそうだ。「私が勉強して、家族を楽にさせてあげたい。」そう語っていた女の子は、一冊の教科書を友達と貸し借りをして勉強しているそうだ。僕はその番組を見て「中国って大変だな」と思った。同じようにテレビを見ていた父は、「日本の子供の教科書代は、国民の税金から賄われているから感謝しないと」と言った。僕はその言葉にとても驚いた。なぜなら、僕は今までずっと父が教科書代を払ってくれていたからだ。僕は、すぐに日本の教育制度を調べた。すると「教科書無償給与制度」という制度が日本にあることが分かった。日本の大人が僕たち学生のために、勉強しやすい環境を与えてくれていると思うと感動した。

「教科書無償給与制度」以外に、日本の税金で僕たち子どもがどれだけ恩恵を受けているか調べてみた。すると、図書館やスタジアムなどの建設に税金が使われていることが分かった。もし、これらの施設の運営を民間が担っていたらどうだろう。その民間の企業が経営を維持するために入館料が必要になる可能性だってあったかもしれない。有料ならば、自由に入出入りができない図書館などを利用する人は減り、子供たちの可能性の幅が狭くなり、自由な発想も生まれにくくなっていたであろう。そう考えると、僕は「僕たちが払った税金は、必ず自分たちの生活の恩恵になって必ず戻ってくることに気づいた。

それに気づいた翌日、僕は授業の準備をして新品の教科書を、リュックに入れ、背中に背負った。すると背中がじんわりと暖かくなった。僕は、感じたこの温もりは、「日本で暮らすすべての人の温かさ」だと。僕は、誓った。将来、税金をきちんと納められる立派な人間になることを。そして、その税金でまた多くの子どもたちが自由に勉強できる環境を作りたい。